

# 近世飛驒国高山町の人口分析

## — 近世飛驒国人口論第二報 —

坪 庄 次

### 一、序 説

本稿は、筆者の企画している近世飛驒国の人口論の一部をなすもので、これをもって第二報としたい。第一報は、昭和四六年四月二日、専修大生田校舎で開催された歴史地理学会第一四回総会においてその概要を研究発表し、次いでこれを愛知教育大学地理学報告第三六・三七合併号（昭和四六年五月）に成稿した<sup>(1)</sup>。その第一報において述べた要旨は次のようであった。

① 近世飛驒国の人口推移をみると、概して漸増の傾向をとっていたものと認められる。この漸増型は、東北・関東・近畿などの停滞減少型とは異なる型であるが、封建的わく内において水準の低い生活を営みながらも、山村には山村としての人口扶養弾力性があったものかと考えられる。

② 約五〇〇冊におよぶ差出明細帳を整理して、村落別一戸当人員の人員階級別頻度表を作製し、尾張平野部と対比してみると、先進的な平野部が過度小家族化ともいふべきいぢるしい傾向を見せるのに対して（一戸当り三・〇〇〜四・〇〇人）。飛驒国は一戸当り四・〇〇〜五・〇〇人附近にピークがあり、これはやはり前記の山村における人口扶養弾力性（後進性）を

第1表 飛驒国高山町の人口推移

年 代	家 数	竈 数	人 口	1戸当	備 考(資料)
享保15 (1730)	1,618	2,091	—	—	飛驒國中案内
延享1 (1744)	1,513	—	7,212	(4.8)	高 山 市 史
寛政1 (1789)	1,457	—	7,762	(5.3)	明 細 帳
寛政12 (1800)	1,617	—	9,426	(5.8)	同 上
文政10 (1827)	—	2,570	9,870	3.8	宗門人別改帳
天保13 (1842)	1,671	—	9,237	(5.5)	高 山 市 史
明治3 (1870)	1,672	—	11,180	(6.7)	風 土 記
明治4 (1871)	—	2,990	11,599	3.9	宗門人別改帳
明治5 (1872)	—	3,636	13,032	3.6	高 山 市 史
明治8 (1875)	—	3,638	13,081	3.6	第一回共武政表
明治11 (1878)	—	3,319	14,090	4.2	第二回共武政表
明治20 (1887)	—	4,972	22,414	4.5	地方行政区画便覧

( )は家数一軒当り人員

反映しているものと考えられる。

③ 約六〇冊の宗門人別改帳を分析すると、白川郷の外にも、益田郡馬瀬

地区など、奥地のあちこちに大家族構成の家族のある村が見出される。

この反面、飛驒では先進的とみられる高山町やその周辺では、小家族化が過度と思われるほどに進展している状況をみる事ができる。これが実際上のものか帳面上のものか吟味検討を要するであろうが、各村落別人口構成の詳細分析と共に、今後の研究課題としたい。

さて本稿は、右の第三の結論と問題点とを受けて、高山町における家族構成その他人口構成の実態について吟味検討を試み、その結果を報告するものである。尚、前記歴史地理学会第一四回総会における発表の際、評者中島義一氏より次のような所見を得ている(歴史地理学会々員通信第五九号)。「飛驒随一の町場である高山一之町村の場合、二人三人の少家族が多く、最多でも八人との資料が示されていた。多くの奉公人を抱える豪商の場合、どのように処理されていたのが知りたい点であった」。これは誠に適切な御指摘であり、本稿は右の御所見に対する返報をも兼ねることとしたい。

## 二、高山町の人口推移概況

近世の高山町の人口推移を概観するため第1表を作製した。

第1表によると、近世高山町の人口推移は、概して漸増の傾向をとっていたものと認められる。すなわち、享保し延享期に約七千人、寛政し天保期に約九千人、明治初期に入って約一万人を突破する。ここで興味深いことは、第一報で報告の通り、近世飛驒国の人口が享保寛延期に約七万人、文政し天保期に約九万人、明治初期に入って約一〇万人を突破するから、近世の高山町は飛驒国全体の約一割の人口を擁して繁栄していたことになり、人口の総合的指標としての意義を考えると、高山町の飛驒国における中心性の偉大さを察することができる。尚又、第1表にみられる通り、明治八年刊行の共武政表における高山町の人口が一万三〇八一人であるが、同書による岐阜県都の岐阜町が一七八〇〇人、西濃の中心大垣町が一五一八人であったから、高山町は当時濃飛兩國（岐阜県）随一の町場として繁栄していたとみることができよう。

さてこのような概況の中で、問題としなければならないのは家数と竈数とについてである。飛驒國中案内（延享三年上村木曾右衛門著<sup>②</sup>）によると、『三町端々共に家数千六百十八軒あり、此竈数合二千九十一あり』となっており、宗門人別改帳にも、例えば岐阜県史料編近世四に所収の壱之町村宗門人別改帳（天保十四年）の川上屋利右衛門組のしめくりに、『竈百三拾三、家数合四拾八軒、内寺壱ヶ寺、式拾三軒家持、壱軒地借…式拾三軒借家』とある。これらの点から考えると、家数は文字通り家の軒数であり、ここに割り込んで住む住民の世帯数（戸数）が竈数であると理解されよう。すなわち第1表では一竈当り人員を計算し、家数一軒当り人員は（ ）で示したが、近世の竈数を世帯数として計算した一竈当り数値が、明治に入ってからの一戸当り人員とだいたい符号する点を読みとることができよう。ところが、問題はそれで終ったのではなく、広く宗門人別改帳を分析してみると、特に一竈当り人員で少人数のものがあまりにも多いという疑問点に遭遇するのである。以下章を改めて分析してみよう。

第2表 高山三町竈別人員階級表（文政10年）

村 家族人員	壹之町村	貳之町村	三之町村	計	%	参 考	
						昭和5年 日本全国	明和7年 山崎村
1	120	45	74	239	9.3	5.5%	9.1%
2	219	130	158	507	19.8	11.8	15.2
3	215	146	172	533	20.7	14.8	24.2
4	176	151	139	466	18.2	15.1	23.2
5	132	108	100	340	13.2	14.5	16.7
6	82	64	73	219	8.5	12.7	6.1
7	49	48	40	137	5.3	9.9	2.5
8	26	18	23	67	2.6	6.8	2.0
9	12	13	5	30	1.2	4.1	1.0
10	3	5	2	10	0.4	2.4	0
11	3	1	3	7	0.3	(2.5)	0
12	2	3	1	6	0.2		0
13	3	1	1	5	0.2		0
14	4	0	0	4	0.2		0
15~	0	0	0	0	0		0
計	1,046	733	791	2,570	100.0	100.0 (1260万戸)	100.0 (198戸)

## 三、家族構成

高山市郷土館には、高山三町の宗門人別改帳が豊富に貯蔵されている。参考のためその冊数を整理してみると、壹之町分は文政二年から明治四年まで連続して五三袋（一袋二冊で一〇六冊）、貳之町分は安永二年から明治四年まで連続（明治三年欠）して九八袋（一九六冊）および享保四年分一冊、三之町分は僅少で、寛政五年・文化二年・同一〇年・文政元年・同一〇年・同一二年・明治四年の七袋（一四冊）、合計三一七冊に達し、その他寺内町・日影町・神明町など周辺の支村のもの約二〇冊を合すると、合計三三〇余冊に達する。三之町分が僅か七袋（一四冊）に亡失したのには惜しいことであるが、全体としては誠に貴重な史料といえる。岐阜県史料編近世四は、右の宗門人別改帳のうち、壹之町村天保一

四年分について、しかもそのうちの川上屋利右衛門組（全町内を一五組に分けている）の分を収録している。

さて筆者は右のうち、三町分の揃っている文政一〇年のもの（三袋六冊）について、家族構成をみるという視点から、竈別人員階級表を作製した。第2表がそれである。

第2表によると、一竈に一人ないし三人という少数のものが如何に多いかに一驚させられるであらう。すなわち、全竈数二五七〇のうち、一竈一人というのが二三九竈（九・三％）、一竈二人というのが五〇七竈（一九・八％）にも達し、最大ピークは一竈三人の五三三竈（二〇・七％）である。この竈数を世帯数と解釈して、これを昭和五年日本全国（国勢調査）と対比すると、いちじるしい小家族状況と申さねばならない。さらに第2表で、明和七年尾州愛知郡山崎村の例と対比すると、それにも劣らぬ小家族状況を表わしているものといえよう。この山崎村は、名古屋城下町南部の東海道に沿う街村で、尾張御行記には、『民戸海道トホリニ陸続シテ茅屋軒ヲツラヌ』とあり、近世東海道沿いの窮迫農村の典型と考えられるものである<sup>3</sup>。要するに第一報で報じたように、山地飛騨国では、周知の白川郷の大家族の外に、益田郡馬瀬地区など、奥地のあちこちに大家族構成の村が見出される反面、先進的と見られる飛騨随一の町場高山町やその周辺では、小家族化が過度と思われるほどに進展していたとみることができるところで、宗門人別改帳の表明している限りでは右のような状況であるけれども、問題はこれで終わったわけではない。すなわち、この過度小家族化が実際上のものか帳面上のものか、なおよく吟味検討することが要請せられるであらう。さて第2表について、最大の人員一四人という大構成のものが四竈あり、そのうち一つは寺院であるから省略し、三竈分についてその内容の人員構成をみると第3表の通りである。

第3表によると、高山町においても、人員も一四人という大構成になると傍系者を多くふくみ、弟・妹・姉・従弟

第3表 家族構成事例

① (田中半十郎 (66 妻) (62 (男子半十郎 (38 妻) (32 娘 15 " 12 " 7 (妹婿 (56 妻) (50 男子 19  妹 60 養子 15 譜代(男子) 48 " ( " ) 16	② (家持徳兵衛 (62 妻) (44 (養子 (23 妻) (22 娘 7 妹 38 娘 12 " 10 徒弟 53 徒姉 55  譜代(男子) 25 " (女子) 22 " (男子) 20 " ( " ) 16	③ (家持源兵衛 (25 妻) (24 男子 8  (父母) (51 (40 妹 13 譜代(男子) (38 妻) (33 娘 13 男子 9 娘 7 男子 2 弟 20 譜代(男子) 21
計 男7 女7 ) 14	計 男6 女8 ) 14	計 男8 女6 ) 14

などの外、養子・譜代を持っていることが特徴的で注目される。それぞれの表示は省略するが、その他宗門人別改帳を一覧して他に傍系として注目されるものをあげると、婿・養女・養妹・弟子・同居などの用語である。この反面、労働力の重要担い手である奉公人（下男・下女など）の用語は不可思議ながら全く出て来ない。

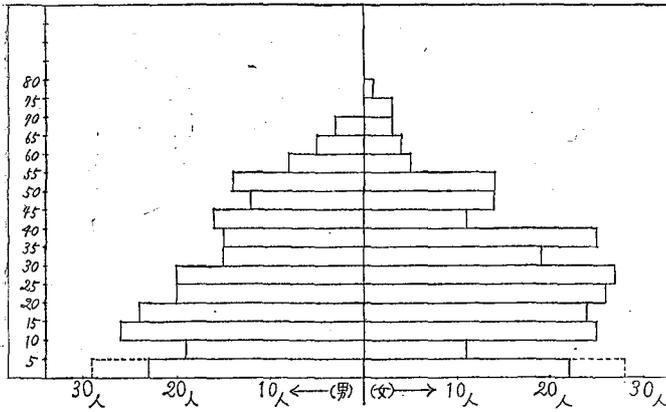
ところで、郷土館文書によると、次のような実例がある(4)。大野郡大原村の百姓九助(三七歳)は、高山の打保屋平右衛門家に一二年間実直に勤めあげた。そこで平右衛門は安政六年(一八三九)、九助を『譜代に抱え、私家宗門人別に詰め差上げ申』したく願ひ出て居るのである。だから奉公人を譜代とするには願ひ出が必要であった。そこまで到らぬ奉公人はどうするか。あるいは一步進んで養子および養女とする方法も考えられよう。試みに岐阜県史料編近世四に所収の天保一四年高山壱之町村宗門人別改帳の中から、養子・養女および同居を抽出してみると、総人員四一四人のうち、養子一六人、養女一七人、同居六人

であり、養子や養女の甚だ多い実態をみる事ができる。ところがこのような養子・養女・譜代・同居などに組み入れられない、いわゆる普通一般の奉公人はどうなるか。宗門人別改帳に全く下男・下女の用語を欠く点よりみて、あるいは別籠の住人として（主家の借家人として）宗門人別改帳に登録するというケースがあったのではないか。これはあくまでも想像ではあるが、宗門人別改帳のからくりとして疑問を投げ、尚今後における研究の問題点として指摘して置きたい。

#### 四、性別年令構成

本章では人口構成の自然構造としての、性別年令構成について分析しよう。ところで、約一万人に達する高山町全体の分析はあまりにも手数がかるので、ここでは岐阜県史史料編四に改録されている天保十四年高山寺之町村（川上屋利右衛門組）宗門人別改帳を主として利用した。

最初にこの町の社会経済構成について一言ふれると、その持高階層構成は、総計一三四竈中、家持二一、地借三に對し、かし屋は一一〇（八三%）の多数である。家持のうち特に大きい高持はなく、五石五斗余が最高で、その反面、かし屋で一〇石九斗余を持つ者が居る。組頭の川上家は名家で、天保三年には町年寄をやつて居り、その年以後の宗門自分一札の宗門帳が郷土館に所蔵されているが、当年の持高一二石五斗八升、家族人員一人で、その中に三人の譜代（男子）をかかえている。当主三七歳、妻二四歳、男子七歳、娘一〇歳、祖母六〇歳、母五三歳、弟三五歳の外、義妹一九歳はあるいは下女の組みかえであろうか。要するにこの町全体としてはそれ以外に特別の富豪はなく、前述のようにかし屋の甚だ多い町柄であるとみられる。このような社会経済的背景のもとで、ではここに住む人々の



第1図 天保十四年高山壱之町村(川上屋利右衛門組)性別年令構成

(註) 宗門人別改帳の作製が2月であることおよび当才子が省かれる点などより考慮して、1~5才の男女各数を $\frac{4}{5}$ で塗り、追加として破線で示した。

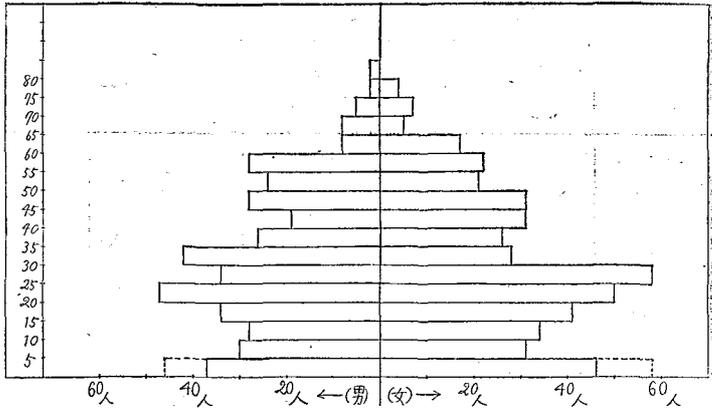
性別年令構成表(五歳間隔)を作製してみると第1図の通りである。

第1図によると、年令構成上、全体として多少の凸凹がみられることは大数法則上やむを得ないが、総計男二二〇

人に對して女は二三四人で一四人の超過をみせ、しかも女の二人に對して女は二三四人で一四人の超過をみせ、しかも女の二〇歳ないし三〇歳年齢層の附近に最大ピークのある点が注目されよう。一般に女に比して男の多いのがわが国近世農村の全国的な傾向のようであるが、それに対して女性の超過は近世の町方の特徴を示すものようである。そしてこの女性超過が二〇歳ないし三〇歳の年齢層に多い点は、女子労働力の尊重(女中その他)と、その外部(農村)よりの流入が考えられねばならないであろう。

岐阜県立図書館所蔵の大野郡高山町方組家数人別牛馬増減差引帳(明治二年)によると、ここは家数一四〇軒、三八三竈七二四人のところで、去る辰年より差引、出生一四人死去二三人である。これから仮に七二四人を分母として粗出生率と粗死亡率とを計算すると、出生率一九・三%、死亡率三一・八%となり、実に少産多死ともいふべき実態といえよう。ところが他村より入一五三人、他村へ出三三人で、差引一一人増となつて

て来た昭和三五年の各務原市那加桐野町（九二戸四四四人）の例が五二・二％、近世の例では前掲東海道沿いの貧窮



第2図 明治四年高山町方組性別年齢構成

(註) 1～5才の破線追加については第1図の註参照。

いる。この実態と年齢構成とを比較考察して、結局他村よりの流入による累積が、既述の高山町の人口漸増を支えたものと理解したい。尚、岐阜県立図書館所蔵の明治四年高山町方組宗門人別改帳によつて、その性別年齢構成表を作成してみても第2図の通りであり、やはり二〇歳ないし三〇歳の年齢層に最大ピークのある姿をみせている。この場合は、総計男四〇二人に対し女四五二人で、ちようど五〇人の女性超過である。そしてその年齢構成図は、凹凸出入甚だしく、正に近世特有の砲塔型で、特に二五歳ないし三〇歳層の女性の凸起がいちじるしい。

### 五、増殖構造（婚姻）

人口増殖を測定する方法として、筆者は従来、妊孕年齢女子数に対する一〇歳以下の子供数の百分比をもつて増殖率と呼び、濃尾平野の各地について調査して来たところであった(6)。この方法による参考値を示すと、昭和五年および昭和一〇年の多産にして膨張段階の日本全国（国勢調査）が共に一〇・一・〇％、家族計画と産児制限の普及し

第4表 妊孕年齢女子の有配偶率

村 年令	天保14年高山 寺之町村 (川上利右衛門組)	明治4年 高山町方組	参考(安藤氏による)	
			飛驒(1870)	日本(1930)
16 ~ 20	8.3%	2.4%	8.0%	1.0%
21 ~ 25	50.0	28.0	32.0	60.0
26 ~ 30	85.2	55.0	55.0	83.0
31 ~ 35	73.6	53.5	71.0	90.0
36 ~ 40	54.5	88.5	83.0	89.0
41 ~ 45	54.5	90.3	81.0	85.0
計	59.8	48.3	48.0	62.0

(註) 安藤氏の数値は図表から筆者が読解したものである。

農村の明和七年尾州愛知郡山崎村(一九八戸、七二八人)が六三・七%である。そこでこの方法を天保十四年高山寺之町村川上屋利右衛門組(一三四竈、四五四人)に適用すると、増殖率五四・四%となり、同様にして明治四年高山町方組(二三一竈、八五四人)に適用すると五七・六%となる。近世高山町における、前掲の少産にして多死の内容が首肯できる。要するに近世高山町では、妊孕年齢女子が比較的多いにかかわらず人口増殖率は低率で、その全体としての人口漸増は、もっぱら外部農村よりの流入人口によつたものと考えられる。

さて、このような増殖率の低さは何に由来するのであろうか。医療施設の発達しない、多産多死の前工業型段階での特色であるとすればそれまでのことであるが、実態は少産多死ともいえるほどの状況下にあることである。筆者の濃尾平野における研究の結論としては、未婚率の高さ、すなわち平易に申せば、生活苦のための晩婚、さらには結婚もできない人々(男女共に)が多いことに由ると考えられる。ところでこの点は、安藤万寿男氏が早く指摘され、また飛驒白川郷の大家族制の研究においても妊孕年齢女子の有配偶率の低さを強調されているところであるから(8)、ここではそれと対比しつつ高山町の場合を見てみよう。第4表がそれである。

第5表 夫婦婚姻年齢試表（長子出生年齢）

年齢階級	天保14年高山壺之町村 (川上利右衛門組)		明治4年高山町方組		明和7年尾州愛知郡山崎村		昭和13年日本全国	
	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻
20歳以下	2.4%	19.0%	9.8%	35.4%	0.9%	32.2%	0.8%	12.0%
21～25	23.8	38.0	23.2	25.6	6.3	33.0	20.3	51.4
26～30	33.4	26.2	28.0	25.6	27.6	20.6	45.5	21.9
31～35	14.3	11.9	22.0	12.2	32.2	10.7	16.7	6.6
36歳以上	26.2	4.8	17.0	1.2	33.0	3.6	16.7	8.1
計	100.0 (42組)	100.0 (42組)	100.0 (82組)	100.0 (82組)	100.0 (112組)	100.0 (112組)	100.0 (54…組)	100.0 (54…組)

第4表によると、高山町では概して妊孕年齢女子の有配偶率が低く、特に明治四年町方組の場合において低く表われている。しかも当時は早婚の風があり、二〇歳以下で結婚している者もいるにはいるが、高年令の女子において有配偶率が低いというところに特徴が見出される。

右に述べた点は、男女の結婚年齢がわかればよりはっきりとするであろう。しかし男女の結婚年齢は宗門人別改帳では検出できない。ところが長子の出生年齢はある程度検出できよう。すなわち、宗門人別改帳の中からなるべく正確と考えられる夫婦を抽出して、その長子の出生年齢を検出する方法である。これによると、数年のおくれを考慮すれば、大まかながらの婚姻年齢が想定できるのではなからうか。そこで試にその方法を採用してみると第5表の通りである。

第5表によると、男子は二六歳から三〇歳年齢層にピークがあり、現代とあまり大差はないといえようが、女子は二〇歳以下の若年齢層の比率がそうとう高く、当時の早婚であった状況を読みとることができよう。ところが、そのような早婚の傾向を見せながらも、高年齢層においてはそうとうな晩婚の比率をもち、当時の早婚ではあったが晩婚でもあったという実態を察することができる。この点飛驒は東海道沿いの貧村山崎村ほどに極

第6表 夫 婦 年 令 差

村 年齢階級	天保14年 高山老之町村 (川上 利右衛門組)	明治4年 高山町方組	明和7年 愛知郡山崎村	昭和13年中 日本全国
15以上	13.4%	10.0%	12.9%	0.6%
14～10	12.2	14.5	37.1	6.3
9～5	29.3	34.7	31.8	40.0
4～0	28.0	44.6	16.7	46.6
—1～—5	11.0	14.7	1.5	6.2
—6～	6.1	3.6	0	0.4
計	100.0 (82組)	100.0 (138組)	100.0 (132組)	100.0 (54万組)

① 高山町の人口推移は、概して漸増の傾向をとつていたものと認められる。一国の中で、その中心都市が総人口の約一割を擁しているといふことは、偉大な中心性を示すものといえよう。

② などを分析した結果、次の諸点を知ることができた。

端ではないとしても、恵まれた人々の早婚に対し、恵まれざる人々の晩婚という実態があらわれていると見られるのである。

最後に、右のような早婚にして晩婚という婚姻構造の中では、夫婦間の年齢差は開いて来る。主として経済的理由などにより結婚に恵まれずして三〇歳を越えた男子が、いざ結婚ということになると、若い女性と結婚したいのが昔も今も人情の常のようで、夫婦間の年齢差は自ら開かざるを得ない。第6表によると、度々参考に出す明和七年尾州愛知郡山崎村という貧村ほどではないにしても、夫婦間の年齢差は現代よりもそうとうに開き、且つ高山町では姉女房が多かったという特色を見せている。これも結婚難ないし晩婚という現実から生れた人間生態であると考えられよう。

#### 六、結 語

主として高山市郷土館および岐阜県立図書館所蔵の宗門人別改帳を資料として、近世高山町の人口推移や家族構成・性別年齢構成・増殖構造(婚

② 家族構成をみるという視点から、文政一〇年の全竈数二、五七〇について、竈別人員階級表を作製すると、一竈一四人というのが最大で、あまり大家族構成のものはない。その反面、三人以下の竈がすこぶる多く、このことから、竈数即世帯数とする点に疑問が湧く。宗門人別改帳に下男や下女が一人も居ないことから、労働力の需要は譜代・養子・養女・同居などに組みかえられたかと考えられるが、奉公人を別竈として登録するというケースも相当あったのではないか。

③ 性別年齢構成をみると、高山町は女性が超過を見せ、そのピークは二〇歳ないし三〇歳の年齢層である。別途増減差引帳の示すところから推察しても、近世町方の特徴として、女子労働力の尊重（下女など）と、その外部農村よりの流入が考えられる。

④ 人口増殖力を筆者なりの方法で算定してみると、高山町ではそうとうな低率を示し、結局別途増減差引帳からも察せられるような、少産にして多死という程の実態を示す。そしてこの増殖率の低さは妊孕年齢女子の有配偶率の低さと関連し、生活苦のための晩婚がうかがえる。

⑤ ところがさらに別途の結婚年齢の試算によると、早婚ではあるが晩婚という婚姻構造内部の歪が察せられ、このような早婚ではあるが晩婚という婚姻構造のもとでは、夫婦間の年齢差も拡大された形で現われている。終りに資料の閲覧に御高配を頂いた高山市郷土館長小林幹氏および館員の方々に深甚の謝意を表したい。

## 註

- (1) 拙稿 近世飛騨国人口論(序説第一報 愛知教育大学地理学報告三六・三七合併号(一九七一年五月))
- (2) 飛騨国中案内 増補完本(一九七〇年一月二月)
- (3) 拙稿 近世濃尾農村人口増殖力の地域性(尾州愛知郡山崎村の場合、愛知教育大学地理学報告二二、  
(一九五八年一月二月))
- (4) 岐阜県史 通史編近世上(一九六八年三月)
- (5) 内田 寛一 近世農村の人口地理的研究(一九七一年六月)
- (6) 拙稿 濃尾平野の近世における人口構造に関する研究、愛知教育大学地理学報告二〇(一九六八年三月)
- (7) 安藤万寿男 江戸時代輪中地域の人口、地評二三―一(一九五〇年一月)
- (8) 安藤万寿男 岐阜県新誌(一九五〇年九月)